

高校生の就職内定率が10月末現在で47%という最悪の数字が文部省調べで、わかった。沖縄では内定率15%という状況である。20%–30%というのが地方の実態である。大学生も同じように厳しい。

わたしの所属する鹿児島大学教育学部は、275名の学生に対して教員採用の内定した学生は、48名。正規の教員内定者は極めて少数派である。その他就職者27名と、12月1日現在で、多くの学生は、就職が決まっていない。就職内定率は、30%を割っている。

このような状況のなかで、最も考えなければならないのは、学生の将来にたいする希望や夢が失われていく怖さであり、人間的な協同や連帯の心が育っていかない問題である。人生に対するなげやりや虚無的精神構造が増えていくのが心配である。若者達は、日本の未来、明日の人類のための宝である。歴史を常に新しいものにつくりかえてきたのは、若者達のエネルギーである。

大学として、社会と接して学生に希望や夢をもたせる機会や場を提供するのは、大切な教育活動であると考えている。文系の場合、学生の居場所さえも大学内に確保されていないのが一般的である。教育学部の場合、多くの単位数を占める教職の科目はマスプロの授業が多い。鹿児島大学の教育学部の場合も、学生が300名足らずであるが、200名から300名が教職の講義である。

学生が自分自身で、子どもや教育問題などで課題発見し、学問的興味をもって学習をしたという経験をもっていれば助かるが。現在のような、厳しい学生の就職難では、前向きに学生教育に責任をもっていかねばと、痛切に思う。

2002年11月に行われた九州での協同の研究集会での若者と仕事の分科会では、困難な社会状況のなかで、若者達が未来に向かって、夢をもち、新しい動きをしていることに、多くのことを学ばせてもらった。

知的障害者の社会的自立の支援のボランティアをとおして、世代に異なる人たちが同じ場所で学んでいる。ヘルパー講座に学生も参加してくる。若い人たちは素直な姿勢でお互いを認めあって、展望をつくっていくが、指導的立場の人は使命感が先にあって、こうしなければならないということで、なかなか効果があがらない。若い

人は認められることによって、落ちこぼれと言われていた人も立ち上がって大きな力をだすと。夢は天才的能力をもっている人が実るというイメージを青年達は、もたされてきたが、生き甲斐、夢をもって、好きなことをしながら発見していくということがボランティア活動のなかで若者達は学んでいる。

夢を寝言のよいうにしゃべっていたら、まわりの人がついてきた。ふみだし、ふみはずこともできない育ちを強制されてきた青年達が、最初は、楽しそうにやっているということで、惹きつけられてボランティアに入ってしまった。6名の青年達で子ども未来館を運営し、体験学習・子ども劇団、指導者養成講座、国際子どもフェスティバルなどの子ども関連事業を町から委託されて実施している21歳のリーダーは、大勢の人が協力してくれることの大切さ、自分自身の人生を考えるのに大変役にたっている。農業高校を出て、動物飼育会社で働いていたときには得られない体験を現在していて、毎日が楽しいと語る。若くても子どもの関連事業ができるという自信をもっている。子どもには若者が必要ということであり、若者には大人が必要ということを学んだ。また、おじいちゃん、おばあちゃんが子どもに必要なことも青年達は実感している。

筑豊の子育のネットのボランティア活動に参加する学生達は、大学は地域社会から閉鎖的空間ということで、せっかく筑豊に住んでいても、地域のことは何も知らないということに疑問をもった。考える青年になりたい、夢をもつ大切さをボランティアで学んだと強調する。

酒におぼれていた青年が、協同の仕事のなかで、立ち直り、地域の福祉事業を積極的につくりあげていく実践。この報告は、労協の実践で育つ若者の人間的な成長の姿が浮き彫りになった。若者は、希望と夢のなかで大きな行動力をもつということは、鹿児島大学の学生のモンドラゴンへの調査の旅やベトナム雑貨の貿易活動で知らされた。九州の協同集会の若者分科会は、夢を求めて、未来志向的に生きる若者の姿のすばらしさをあらためて発見するものであった。さらに、就職を探す活動というばかりではなく、社会に役にたつ仕事をみんでつくっていくということが大いに語られた。